

# 大学生の地域認識—「お国自慢」に着目して—

梅田 克樹

千葉大学・教育学部

Regional perception of university students: How to describe their home country?

UMEDA Katsuki

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究は、大学生が自県に対してどのような地域認識を有しているのかを、「お国自慢」の調査を通じて明らかにした。調査対象とした学生は、千葉県出身の千葉大学教育学部生のうち、事例主義と方法主義を重視した平成10年版学習指導要領下において小中学校の地域学習を受けた世代である。調査の結果、次の諸点が明らかにされた。①「東京大都市圏ならではの住みやすさ」や「自然環境の豊かさ」など、居住地としてのバランスの良さを挙げた学生が多かった。②第一次産業についての回答が多くみられたのは、景観面で重要であり、日々の食生活にも直結するためと考えられる。③学生の食生活や余暇活動のあり方が、地域認識の形成に強く影響していた。④副読本「ちば・ふるさとの学び」の存在は、「第一次産業」や「成田空港」などの回答に影響を及ぼした可能性がある。

キーワード：地域認識 (Regional perception)・地域学習 (Area studies)・学習指導要領 (the Courses of study)  
副読本 (Supplementary books for schools)

## 1. 緒言

小中学校の社会科は、わかりやすい具体的内容を出発点とし、徐々に抽象度を高めていく構造になっている。小学校第1・2学年の生活科では、具体的な活動や体験を通して、身近な人々や社会・自然と自分とのかかわりに関心を持たせる。対象とされる空間的範囲は、おおむね学校区までとされている。生活科を引き継いだ小学校第3学年の社会科では、身近な地域から市町村へと空間的範囲が広げられ、空間的分布や相互関係を表現するために地図が用いられるようになる。第4学年になると、自分たちの都道府県を単位とした学習が展開される。調べ学習等を通して、それぞれの都道府県における地理的環境や社会的事象の特色や課題等を理解するとともに、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養うことが目指される。第5学年では空間的範囲が日本全国へと拡大され、国土の地理的環境の特色や産業の現状等について理解する。地域的スケールを完全に超えて、産業を軸とした系統地理的学習がなされるのである(大藪 2008)。そして、中学校第1・2学年の学習へと引き継がれていく。

経験主義と系統主義との間で揺れ動きながらも、小学校社会科の内容は大筋において堅持されてきた。昭和26年学習指導要領(試案)によって骨格が形作られ、昭和33年版学習指導要領において原型が完成したものと言えるだろう。時代の変化に伴って取り扱われる対象は変化してきたし、授業時数の削減に伴って内容が精選されたものの、変化の程度は相対的に小さかったのである。これとは対照的に、中学校社会科の内容は激変を遂げてきた。昭和52年版学習指導要領までの静態地誌から、平成

元年版における窓方式の導入を経て、平成10年版においては事例主義・方法主義へと極端に傾斜するようになった(吉田 2008)。「日本の諸地域」学習においては、すべての地方を網羅するような地誌学習が放棄され、3つ程度の都道府県についての学習を通じて「地理的な見方・考え方(コンピテンシー)」を獲得することが重視されるようになった。続く平成20年版においては、事例主義への傾倒に対する反省から内容主義の復活がみられるとともに、動態地誌的な学習が強調されるようになった(竹内 2009)。内容主義と方法主義の適切な組み合わせを追求しようとする試みは、最新の平成29年版へと引き継がれている。

こうした中で、学習指導要領が改定されるたびに大きくその姿を変えてきたのが、中学校第1・2学年における身近な地域の学習、すなわち「地域調査」の単元である。先述のように、小学校第4学年における都道府県を単位とした学習は、長期にわたって維持されてきた。その一方、中学校第1・2学年のそれは、コンピテンシー獲得を重視した平成10年版においては非常に充実していたものの、内容主義への回帰がなされた平成20年版においては劇的に圧縮されてしまった。そこで、「総合的な学習の時間」を活用したり、技術・家庭科をはじめとする他教科と連携したりしながら、地域学習の充実をめざした現場の取り組みが重ねられている(岡山県教育センター編 2001)。千葉県においては、県教育委員会が発行する副読本「ちば・ふるさとの学び」が県内全中学校に配布されてきた(「ちばふるさとの学び」作成委員会編 2009)。本文91ページからなる同書は、小・中・高の現場で活躍する教員ら25名が執筆し、地域学習の実施にあたって障害となるカリキュラムと教材の不足の解消に貢献しようとしたのである(第1表)。編纂にあたっては、「ふるさと「ちば」の歴史や風土、自然などについて、もっとよく知っ

連絡先著者：梅田克樹 umeda@faculty.chiba-u.jp

第1表 「ちば・ふるさとの学び」の内容構成

章	分野	本文	課題	資料	コラム	教科
序論	序論	4	0	5	0	-
1	気候・地形・植生・生態系	4	4	4	1	総合
2	歴史・交通・地名・遺跡	4	4	4	3	社会科 (2)
3	農漁業・郷土料理・自給率	4	4	4	1	技術家庭科 (2)
4	地震・洪水・減災・防災	4	6	4	3	学級活動
5	職業選択・JICA・空港・井戸	4	5	4	1	総合 (2)

第2表 学生による「お国自慢」の代表的回答

項目	実回答人数	のべ回答数
総合イメージ 総合的にとても恵まれている／充実している／何でも揃っている／生活に必要なことは何でも県内で足りる／便利な生活を送ることが出来る／にぎやかなのに落ち着いた／のどかで落ち着いた／ちょっと発展中で過ごしやすい／暮らしやすい場所／風光明媚な場所／住むには最高の場所／ベッドタウンとしては良すぎる／日本の中でも有名なものがたくさんあるほう／教育に良い環境	17	25
東京への近接性 日本の中心東京／都会に近い／都市部への移動手段／交通手段が整っている／都内まで大体1時間でいける／南部は交通の便が悪い／関東全域に行くのにとっても便利／日本の真ん中くらいにある／東京寄りには発展している／東京に通勤・通学する人が多い／流行が意外と早く来る／自転車で東京に行ける	22	41
地域的多様性 (東京に近い割には) あまり都会的でなく田舎っぽい／都会と田舎の中間的な雰囲気／都会も、とことん田舎なところもあるので、遊ぶのにも隠居するのにも困らない／都会の顔を持つけど自然が豊か／各都道府県でも随一のオールインワンな県 (県内に違った顔	8	10
自然環境の豊かさ 自然がいっぱい／豊か／身近／触れ合える／(都内に比べて) 緑が豊か／(東京に近い割には) 自然が溢れているところにもすぐ行ける／空気が美味しい／花粉の時期は辛い／騒音がない	10	13
気候 温暖な気候／暑すぎず寒すぎない気候／(台風や集中豪雨などの) 災害が少なくて平和	8	10
海や山の存在 海がある／三方を海に囲まれている／東端のほう (飯岡灯台など) からでも海が見える／山あり川あり海あり／中部には山もある／山がなく平坦／海水面が上昇したら一番早くに沈みそう／東部や南部では風景が美しい／釣りスポットになる港が多い	11	17
農業 田や畑が多い／田園風景が広がる／近郊農業が盛ん／東京等の大都会に野菜を供給している／ホウレンソウの産地／銚子キャベツ／ねぎの生産量が多い／千葉産コシヒカリ／米の生産量が多い／すいかが美味しい／いちごがとれる／北西部には梨畑がある／ピワがとれる／落花生／ピーナッツの産地、おいしい／たくさん花がある／花がいっぱい咲く「花の都」／菜の花が有名／春にはチューリップ畑が広がりと和む／春には安房地域で花狩りが有名／畜産 (酪農・肉用牛) が盛ん／産地地消が出来ている／千葉千消	25	91
漁業 魚が新鮮で美味しい／漁業が盛ん／銚子は漁獲量が多い／銚子や館山は漁港として有名／勝浦のカツオが有名／手賀沼は昔は鰻で有	14	19
レジャー・イベント 遊ぶところが多い／観たり体験したりして楽しいものが多い／マザー牧場 (牛や馬に触れ合え花畑とかもすごくきれい、羊の毛刈りで感動)／鴨川シーワールドがある／東京ドイッ村がある／子どもの国がある／市原ぞうの国がある／養老渓谷でハイキング／山菜料理／一年を通して観光客が多い／九十九里浜や勝浦で海のレジャーが出来る／海水浴が出来る／海岸沿いをドライブしたりするのがとても楽しい／幕張メッセで色んなイベントがある／白子町にはテニスコートがたくさんある／すいかロードレースが行われ、毎	16	32
東京ディズニーランド・シー 東京ディズニーランド・シーがある／日本を代表するテーマパーク／名前に東京と付いてしまっているのが悲しい限り／あんなにたくさん人の人が地方から集まってくる／外国人の観光客が多い／夢と希望の王国／何回行っても何歳になっても楽しい夢の王国／所在地の舞浜は「マイアミ」から名付けた／すぐ行けるので便利／隣接市民には割引があってお得	26	49
スポーツ観戦 さまざまなスポーツがさかん／千葉ロッテマリーンズがある／ジェフや柏レイソルがある／国体開催／チーバ君がかわいい／白子が国体のテニスの開催地になる	10	21
成田国際空港 成田空港 (新東京国際空港) がある／世界の玄関口／海外から来る人がまず最初に下りるのは感動的／旅行に行くとき便利／名前に「東京」とつくのが寂しい限り／来日する俳優の出待ちがしやすい／成田空港では全国各地のお土産を買える／プチ英会話をすぐ実践できる／でも使ったことない／アクアライン／海ほたるがある／渋滞なく神奈川県に行ける	26	44
その他 住民が温かくてフレンドリー／千葉市は結構「都会」／船橋・市川・千葉は都会的／人口が約600万人／新日鉄など内房の工業地域／醤油が有名／運賃が高い鉄道路線 (北総線) がある／長いモノレール (千葉都市モノレール) が走る／茨城・埼玉には負けたくない／伊能忠敬の出身地／森田健作が知事／物価が安い／都心に比べて圧倒的に地価が安い／成田山の正月参拝者数は日本第3位／給食で落花生ご飯が出る／ゆで落花生を食べるのは千葉県だけらしい／長嶋監督監督をはじめ多くの芸能人の出身地／テレビの撮影 (旅番組など) が良く来る／ので有名人に会える／「菜の花体操」を今でも踊れる／習志野に自衛隊基地がある／千葉県のおかげで東京都民は生きている／佐原に行くときタイムスリップした気持ちにさせてくれ気分転換できる (町並みを再現した感じが)／手賀沼に魚が戻ってきたけどまだ汚い／手賀沼にはカッパがいる (銅像)／茨城県に近いので「チバラギ」と俗称している	27	55

てもらい、郷土に自信と誇りを持ち、国際社会にはばたいてもらいたいという強い願いを込めた」とされている。そのほか、社会科教科書の有力出版社と知られる帝国書院(株)が、「県学習用〇〇県を調べよう」(各16ページ)を刊行しており、広く活用されている。

とは言え、学習指導要領における位置付けの変化や、教育委員会による積極的な取り組みが、現場にどの程度浸透していたのかという点については、慎重に考えるべきであろう。「郷土学習」と呼ばれていた時代の1950年代には、「時間と費用」の不足ゆえに低い実践率にとどまっていた(日台・今井 1957)。竹内(2009)は、現在の「身近な地域」学習の抱える問題点として、「他の教科との時間及び時間割との関係、適切なカリキュラムが用意されていない、資料不足、進学の学習に関係ない、教科書との関連が困難で授業が進めにくいなど」を挙げ、1950年代に指摘されていた諸問題と「あい通ずる諸点」であると述べている。地域学習に対して積極的に取り組んでいる学校は、昔も今も必ずしも多数派とは言えないのである。「ちば・ふるさとの学び」の利用率が必ずしも芳しくないとの声も、複数の現場の先生方から伺ったことがある。

それでもなお、これだけのボリュームの副読本が生徒全員に配布され、必ずしも積極的とは言えないにせよ地域学習の授業実践が各学校でなされたことの意義は、正に評価されなければならないだろう。現在では、副読本の配布こそ続いているものの、地域学習の授業実践は多くの学校において縮小を余儀なくされている。そのことが、生徒の地域認識にどのような変化を生じさせているのだろうか。この点を明らかにするためには、平成10年版学習指導要領の下で中学校教育を受けた世代における地域認識と、平成20年版以降の世代のそれとを比較することが必要になる。その結果は、「内容軽視」「ゆとり教育」などの批判を浴びた平成10年版学習指導要領の再評価にもつながるかもしれない。

本稿では、このうち平成10年版世代における地域認識について報告する。

## 2. 方法

筆者が担当した2010年度前期「日本の地誌」の授業時間中に、受講生94名(留学生3名を除く)を対象として無記名質問紙調査を実施した。男子45名のうち千葉県出身者14名、女子49名のうち千葉県出身者24名である。所属課程別にみると、小学校教員養成課程48名、中学校教員養成課程23名、生涯教育課程12名、その他11名だった。学年別にみると、1年生43名(うち千葉県出身者23名)、2年生37名(同10名)、3年生14名(同5名)、4年生3名(同0名)だった。彼ら/彼女らが中学校第1・2学年に属していたのは2001~05(平成13~17)年頃であり、全員が平成10年版学習指導要領の下で地域学習を受けたものと推定される。

調査は自由記述式回答法で、出身県の「お国自慢」を書かせた。「郷土を愛する心」には都道府県間格差があるものと考えられ、また県外出身者のサンプル数が少ないことから、千葉県出身者の回答のみを集計対象とした。

その結果、167個(のべ408件、1人当たり10.7件)の「お国自慢」が抽出された(第2表)。

なお、「日本の地誌」は、中学校教諭一種・二種免許状(社会)および高等学校教諭一種免許状(地理歴史)のための必修科目である。受講生のほぼ全員が、中学校教諭免許状(社会科)の取得を目指している。いわゆる文系の学生が多いため、高等学校における地理科目の履修比率は2割程度と推測される。

## 3. 結果

### ①東京大都市圏ならではの住みやすさ

都会に近いのに、ほどほどに自然も残っている。都市機能の享受と良好な生活環境を両立できるからこそ千葉県は住みやすい県であると評価する者が、回答者の過半(20名)を占めた。「生活に必要なことは何でも県内で足りる」「便利な生活を送ることが出来る」など、利便性の高さを評価する回答(9件)や、「暮らしやすい場所」「ベッドタウンとしては良すぎる」など、暮らしやすさを強調するような回答(8件)が、特に目立った。

「都会・日本の中心東京に近い」「流行が意外と早く来る」「日本じゅうに行きやすい」など、東京への近接性を評価した回答者が、38名のうち22名に達した。JR千葉駅からJR東京駅まで特急電車(成田エクスプレス)で最速26分、快速電車でも39分で着く。日常的に簡単に遊びに行ける距離なのである。ただし、「東京寄り発展している」「南部は交通の便が悪い」など、東京へのアクセスには大きな県内格差が存在することを指摘する回答もみられた。

「都会と田舎の中間的な雰囲気」「都会の顔を持つけど自然が豊か」など、都市と農村が県内に共存することのメリットを挙げた回答者も8名いた。安房・上総・下総の三カ国からなる千葉県は、県土面積こそ全国28位と決して広くはないものの、多分に地域的多样性を有しているものと言えよう。ただし、「ちば・ふるさとの学び」において、県内における地域的多样性にはほとんど言及されていない。学生たちが肌感覚として獲得したものと考えられる。

### ②自然環境の豊かさ

10名の回答者が、自然環境の豊かさを挙げた。「自然がいっぱい」「空気が美味しい」「(東京に近い割には)自然が溢れている場所にすぐ行ける」などである。また、「三方を海に囲まれている」「山あり川あり海あり」「釣りスポットになる港が多い」など、山や海が存在を挙げた回答者は11名を数えた。「暑すぎず寒すぎない」「災害が少なく平和」など、温和な気候を挙げる回答者(8名)も多くみられた。

実際のところ、千葉県内において洪水による死者が出たのは1971年が最後であり、風水害は比較的少ない地域である。土砂災害の発生リスクも低い。ただし、本調査を実施したのは2010年4月である。2011年3月に発生した東日本大震災の際には、津波や液状化、工場火災等による被害が県内各地で発生した。食料品の供給が滞るなどして、県民生活が一時麻痺したものである。大震災以降に調査を実施していれば、また違った回答傾向になっ

たのかもしれない。

### ③第一次産業

東京大都市圏の近郊農業地域に位置付けられる千葉県は、全国第4位の農業産出額(4,711億円)を誇る(2016年)。その40.9%は野菜であり、養鶏・養豚などの畜産(28.7%)もさかんである。そのため、回答者のうち4人に3人(25名)が、「田や畑が多い」「野菜の栽培が盛ん」など農業が盛んであることを挙げている。特産品として贈答等に多く用いられる「ピーナッツ/落花生」のほか、「ねぎ」「すいか」「梨」「ホウレンソウ」など具体的な作物名を挙げた回答も多かった。複数の回答が得られた作物は、いずれも全国1位または2位の産出額を有するものである。逆に、年々その重要性が低下しているコメ(14.1%)を挙げた学生は、わずか1人にすぎなかった。学生たちは、千葉県農業の強みをかなりの確に捉えているようである。そのほか、「菜の花」「春のチューリップ畑」などの花卉栽培や、「千産千消」などの具体的な取り組みを挙げた学生もみられた。

水産業関連の回答は14名から得られた。「銚子・九十九里・勝浦など外房漁業」「手賀沼は昔は鰻で有名だった」など、具体的な回答が多くみられる。千葉県の海面陸揚金額は503億円(全国8位)であり、京浜市場向けの重要な水産物供給基地として機能していることを反映した結果と言えよう。

「ちば・ふるさとの学び」では、第3章(農漁業・郷土料理・自給率)を中心にかなりのページ数を割いて、第一次産業に関する記述がなされている。ところが、同書には伝統的食文化についても詳述されているものの、この点について回答した学生は皆無だった。伝統的食文化は学生たちにとって身近な存在ではなくなっており、景観面などの多面的機能を有する農林水産業との相違が明瞭にみてとれる。日常生活の中で身近に接するような事象こそが、学生たちの地域認識に包摂されていくものと捉えられよう。

### ④行楽スポット等

東京大都市圏の郊外に位置する千葉県は、週末の行楽スポット等にめぐまれている。「レジャー面で恵まれている」「海岸沿いをドライブしたりするのがとても楽しい」など、行楽機会の豊富さを挙げた学生はきわめて多かった。「東京ディズニーランド・シー」「マザー牧場」「養老溪谷でハイキング」など、ファミリー層をターゲットにした著名行楽地を挙げる回答も多くみられた。回答者の大半は自宅通学生であり、そのうち6割が1年生によって占められることが、回答傾向に影響したものと推測される。「スポーツ観戦」や「レジャー・イベント」に関わる回答も少なくなかった。

千葉県には、日本の空の玄関口である成田空港がある。「成田空港」を回答に挙げた学生19名のうち、5名は「新東京国際空港」と記載していた。開港当初の正式名称は「新東京国際空港」だったものの、通称名は当初から「成

田空港」であり、2004年には正式に「成田国際空港」に改称されている。このことは、小中学校の地域学習の成果が一定程度みられることを示唆しているのではないだろうか。なお、外国への渡航経験者は43%と高く、空港利用経験の有無が回答に影響した可能性があることを付記しておく。

## 4. まとめ

本研究は、大学生が自県に対してどのような地域認識を有しているのかを、「お国自慢」の調査を通じて明らかにした。調査対象とした学生は、千葉県出身の千葉大学教育学部生のうち、事例主義と方法主義を重視した平成10年版学習指導要領下において小中学校の地域学習を受けた世代である。調査の結果、次の諸点が明らかにされた。①「東京大都市圏ならではの住みやすさ」や「自然環境の豊かさ」など、居住地としてのバランスの良さを挙げた学生が多かった。②第一次産業についての回答が多くみられたのは、景観面で重要であり、日々の食生活にも直結するためと考えられる。③学生の食生活や余暇活動のあり方が、地域認識の形成に強く影響していた。④副読本「ちば・ふるさとの学び」の存在は、「第一次産業」や「成田空港」などの回答に影響を及ぼした可能性がある。

今後は、平成20年版学習指導要領下において地域学習を受けた世代との比較を通じて、小中学校の地域学習が果たしてきた役割とその変化を明らかにすることを課題としたい。

## 文献

- 大藪敏宏 2008. 小学校教科書に見る社会科教育法の潮流—系統学習化される単元学習の方向性と課題—。富山国際大学国際教養学部紀要 4, 49-61.
- 岡山県教育センター編 2001. 中学校における地域学習に関する研究—社会科から総合的な学習の時間への発展—。岡山県教育センター研究紀要 222, 1-32.
- 竹内裕一 2009. 「新しい」地誌学習のあり方—動態地誌的学習をどう構想するか—。地理教育 38, 6-16.
- 「ちばふるさとの学び」作成委員会編 2009. 「ちばふるさとの学び」千葉県教育委員会.
- 中條暁仁・岩本知之・早馬忠広 2014. 中学校社会科における動態地誌的学習の特質と課題—「日本の諸地域」を中心として—。静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇 45, pp.71-81.
- 日台利夫・今井忠夫 1957. 郷土学習の現状と問題点。歴史地理教育 30, 41-47.
- 吉田 剛 2008. 中学校学習指導要領社会における地理的見方・考え方の潮流。宮城教育大学紀要 43, 43-59.